# 石井勲の漢字教室

## 2　漢字による才能開発

### Ⅰ　一年生でも漢字が読める




### 第一章ことばに成功するものは人生に成功する

#### 一　ことばは漢字で学べ

**国語の力は成功のめやす**

「国語の力が豊かなことと、成功との間には、驚くほどの関連がある……あらゆる分野において」という前書きで、「言葉の不思議な力」という文章が、一九六一年の「リーダーズ・ダイジェスト」の七月号に掲載されました。アメリカの科学者、ジョンソン・オコナー博士が、人間工学研究所で、あらゆる職業から選んだ三十五万人以上の人を対象にテストした結果、多くのことばの意味を正確に知っているということが、他のどんな特性よりも、成功の原因である、ということを実証したというのです。

博士は、中学生・高校生・大学生・工場勤務者から、大会社幹部・監督級にまで、テストを行なって、地位の上下と収入が、国語の力と比例しており、国語の力は学校の成績にも比例している、といっています。

人はことばでものごとを考えます。ですから、理解することばの数が多ければ多いほど、その人の思考の幅は広く、理解することばの深さが深ければ深いほど、思考の精密度も高いわけです。ことばを正確に、豊かに使う人が、あらゆる方面で成功しているのは、あたりまえのことだといえるのです。

## 「動物」は「どうぶつ」にまさる

ふつう、一年生には、動物ということばを、「どうぶつ」というひらがなで教えます。ところが、わたしは、一年生に、「動物」という漢字で教えます。すると、子どもたちは、

「先生『動物』って、『動く物』って読めるね」

というのです。わたしは、

「ああ、そうだよ。きみたち、チューリップやたんぽぽやさくらの木が生き物だってこと、よく知っているね。でも、草や木は、ひとところに立ったままで、動くことができないだろ。生き物には、動ける物と、動けない物とがあるので、動ける物を、『動く物』と書いて、『動物』ということにしたんだよ」

と、話してやりました。すると、子どもたちは、驚きの目を見張って聞い ていましたが、

「先生、じゃあ、とんぼもちょうちょも動物なの！」

と尋ねました。

「ああ、そうだよ」

するとほかの子も尋ねました。

「先生、金魚も？」と。

水の中に住むものは、「さかな」ではあっても、「動物」ではないと、ついいままではそう思っていたにちがいないからです。

「ああ、そうだよ。水の中を動きまわるからね」

「先生、ありは動物園にいないけど、やっぱりあれも動物だね」

「先生、人間もやっぱり動物じゃあないの」

とうとう、こんな質問まで出てきました。

動物ということばは、ふつう、三、四年生になっても、その正しい概念を理解できないものです。しかし、漢字で学習するわたしの一年生は、りっぱに正しい概念を理解することができたのです。

**「じかん」と「じこく」とのちがいは漢字でわかる、**

「集合時間は、八時半ですよ。まちがえないようにね」

などと、先生でさえ平気でこんなことをいっています。しかし、時間とは、「時刻と時刻との間」という意味のことばで、時刻と時間とは、明らかにちがった意味のことばです。ところが、学校では、くどいほど、時刻と時間との使い分けを指導するのですが、その努力にもかかわらず、これを混同してしまっています。これはなぜでしょうか。

それは、「じかん」「じこく」というかな表現で教えているからです。これでは、「じかん」も「じこく」も同じようで、一、二年生の子どもには、とてもこの区別はつけにくいのです。

しかし、わたしの指導する一年生は、「時間」「時刻」という漢字で、このことばを学習しますから、ちゃんと使い方のちがいを知っていて、正しくこれを使い分けています。

このように、漢字は、ことばを裏からささえています。この、裏からささえている漢字がよく理解できると、表であることばのもつ意味は、はっきりとしてきます。その実例は、いくつでもあげることができます。

**英語のつづりは発音どおりではない**

ここで、英語でも、ことばの正しい意味を、文字がささえていることを、お話したいと思います。one（一つ）two（二つ）……の「one」というつづりをごらんください。ｏｎｅ（オーエヌイー）ですね。この三つの文字の発音を連ねますと、[ouni:]（オウヌイー）となりますね。この[ouni:]（オウヌイー）というのは、十六世紀のころの発音です。[ouni:]が[oun]（オウン）に変わり、さらに[wun]（ウウン）に変わり、現在の[wʌn]（ウワン）に変わったのです。

では、こんなに変わったのに、なぜ表音文字を使っている英語が、むかしのつづりを変えないのでしょうか。

それは、「o、ɲ、e」という三字の組み合わせが、四世紀もの長い間にわたって、意味を表わす表意文字のような効果をもつようになったからです。フランスの言語学者ソシュールは、これを、「表音文字の表意化」と呼んでいます。つまり、発音を表わす表音文字が、漢字と同じように意味も表わすという効果をもつようになったということです。

「alone（ひとりで）」「only（ただ一つ）」の「one（on）」は、ワン、ツーの「one」と同じ意味で、しかも、発音は、十六世紀のころの音に近いものをいまもなお保っています。ところが、「one」の発音が[wʌn]になったからといって、「won」とつづりを変えたら、「win（勝つ）」の過去を示すことばの

「won」とまちがえやすくなってしまいます。そればかりではありません。「alone」や「only」との意味のつながりが切れ、それらのもつ意味をはっきりとつかむことがむずかしくなってしまいます。それを恐れるから、「one」というつづりを変えないのです

このように、英語でも、文字がことばの意味をささえているのです。文字を知っているのと知らないのとでは、同じことばでも、その深さが……味わいが、ぐんとちがってくるのです。

## 2 漢字の力は学力の基本

### 漢字に強い子はどんな学科にも強い

わたしの長男が、慶応の普通部に在学していたころのことです。父母会で、こんなお話を聞きました。

「全校生徒に漢字のテストを行なったが、その結果、漢字テストの成績のよい生徒ほど、他の学科の成績もよく、漢字テストの悪い生徒ほど、他の学科の成績も悪い」

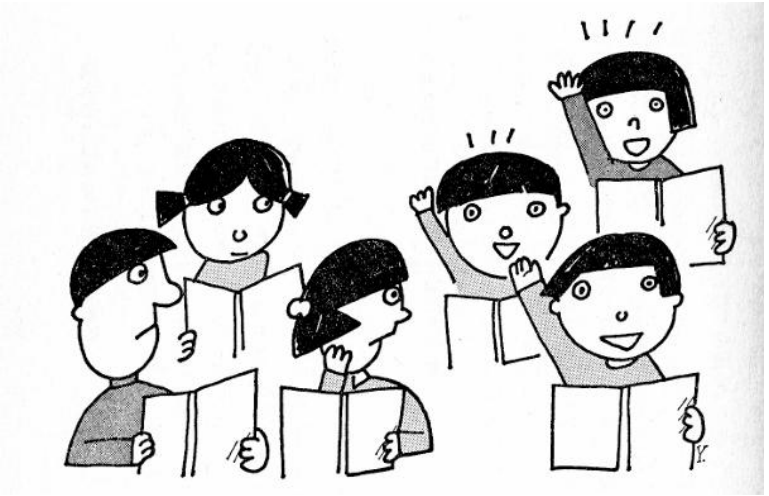
というのです。

このテストをなさり、このお話をしてくださった先生は、いま、普通部長をしていらっしゃる飯泉先生ですが、中学生にも、そういうことがあるのを知り、わたしはたいへんおもしろくこのお話をうかがいました。

### 算数ができないのも文章が読めないから

わたしは、小学校の教育に足を踏み入れて、ちょうど十年になります。そのあいだ、漢字がしっかりと読み書きできる子どもは、ほとんど例外なく、どんな学科でもよい成績を修めていることに、わたしも気がついていました。でも、最初のうちは、漢字がよくできるほどの頭のよい子なら、なんだってよくできるのがあたりまえだ、くらいに考えていました。しかし、多くの先生がたと話し合い、自分の教員生活も長くなってきますと、漢字力が読書力の鍵になっていることがわかってきました。

たとえば、算数で、応用問題（いまでは、文章題といっています）の解けない子どもを、よく調べてみますと、けっして式が立てられないのではなく、まして、計算ができないのではないのです。文章がよく読めないために、問いの意味がわからないのです。問いの意味がわからないので、式を立てること



ができないのです。

この傾向は、社会科や理科になりますと、いっそう強くなります。問題を読んでやると、成績がぐんとよくなり、ひとりでやらせると、成績がまるっきり悪くなってしまいます。これは、明らかに、質問の意味がよく読み取れない、つまり、読書力の弱さを物語っていると思います。

**文章を読む力は学力の基本**

わたしは、おかあさんがたから、よくこんな相談を受けます。

「先生、どうもうちの子は、そそっかしいので困っているんですよ。このあいだのテスト、あんまり成績が悪いんで、わたしが読んでやって、やらせてみますと、ちゃんと、みんなできるんですよ。ほんとうに先生、こういうそそっかしい子どもは、どう指導したらいいんでしょうか」

たいていのおかあさんが、先生に相談しないまでも、こんなことは、一度や二度、きっとお考えになったことがおありだと思います。でも、これは、世のおかあさんがたが考えるように、その子どもだけが、とりわけそそっかしいのではありません。おかあさんが問題を読んでやれば、問題を解く力はあるので、ちゃんとできるのです。学校でできないのは、だれも読んではくれなかったので、問いの意味がわからなくて、できなかったのです。

文章を読む力は、このように、どんな学習にも欠くことのできない、基本的なものなのです。

**漢字の力が学習を能率的にする**

わたしは、いままでに何回も、一年生、二年生という小さな子どもを受け持ってきて、漢字がしっかりと読み書きできる子どもは、どんな学科でも、かならずよくできるということを経験してきました。このことは、どの先生も認めているところです。しかし、飯泉先生のお話をうかがうまでは、中学生ま

でがそうだ、とは思ってもみませんでした。

でも、よく考えてみれば、これはあたりまえのことです。漢字の読み書きがよくできないようでは、他のどんな学科でも、学習をすらすらやることができず、時間ばかりかかって、能率が上がらないわけです。

**子どもたちに漢字の力をつけさせよう**

このように考えてきますと、漢字力は、国語の力を左右する大きな鍵になっていることがわかります。むかしから、漢字の読み書きを問題にするのは、あたりまえのことだったのです。

戦後、表裏一体であることばと文字とをわざわざ切り離して、ことばを漢字と関係なく学習させてきております。これでは、ことばを正しく深く理解することができません。これでは、ほんとうの国語の力はつきません。国語の力のないものには、どんな学問も、そのとびらを開いてくれません。人生の知恵もさずけてはもらえません。わたしたちは、子どもたちのために、まずなによりも強い漢字力をつけてやらなければならないのです。

# 第2章　漢字に強くなる秘訣

## ー　小学一年生が漢字をばりばり読む

**文部省の目標の十倍も覚える**

昭和三十六年の三月、朝日新聞の学芸欄に、大岡昇平氏が、「入学後、二か月で百字……漢字をばりばり読む小学生」という見出しで、わた しの学級を全国に紹介してくださいました。このことから、「石井漢字教室」とか、「石井方式」ということばが、いっぺんに世間に広まりました。

文部省の学習指導要領には、一年生が一年間に学ぶ漢字は四十六字、そのうち三十字ぐらい覚えられればよい、と書いてあります。ところが、わたしの学級の一年生は、入学して二か月で、百字の漢字を覚えたのです。そして、一年生を終えるまでには、文部省の目標の十倍、三百字の漢字を覚えてしまったのです。

## 一流作家を感動させた一年生

大岡氏が、わたしの授業を見にこられたのは、三学期の二月でしたから、わたしの学級の一年生は、事実、三百字ぐらいの漢字を、覚えていたと思います。このときも、五、六年生でも習わない漢字がたくさん使ってあって、とてもすらすらとは読めないような文章を、いきなり子どもたちに読ませました。ところが、わたしの学級の一年生は、大岡氏たちの見守るなかで、これをばりばりと読んで見せたのです。大岡氏は、このときのようすを、「それはまったく感動的な光景であった」と、書いておられます。

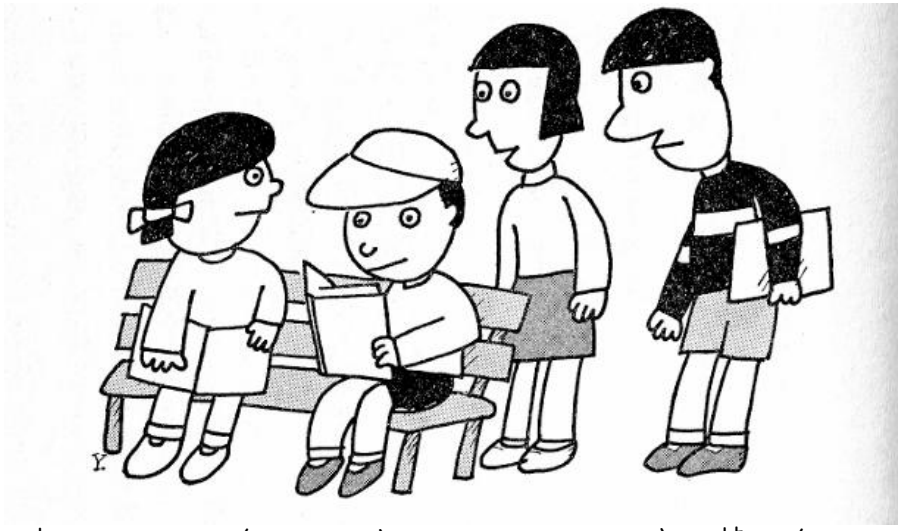
ではつぎに、そのとき、一年生の読んだ文章をお目にかけましょう。

## 一年生がこんな文章をばりばり読む

「竹男さん、肉屋さんへ行ってね」

と、台所からお母さんが言いました。竹男さんは、「はい」と、返事をしました。けれども、本から目を離しません。

「鳥のひき肉を五十円、買って来て頂戴」



竹男さんは、やっと立ち上がりました。そして、お母さんから渡された百円札を、ポケットに入れると、買物袋を持って、急いで出かけて行きました。米屋さんの前で、進さんに呼び止められました。

「竹男さん、どこへ行くの」

「肉屋さんへお使いに」

「何だ、お使いか。走っているから、僕はどうしたのかと思ったよ」

「だって、早く帰って、読みかけの本の続きを読みたいんだもの。さようなら」

竹男さんは、また駆け出して行きました。

肉屋さんの店先には、ハムやソーセージや卵が並んでいました。

「おじさん、五十円下さい」

竹男さんは元気に言いました。

「はい、はい。五十円、何を上げましょうか」

「ええと、何を買うんだっけ。ええと、牛肉ではないし、ハムだったかな。何だったかなあ」

いくら考えても思い出せません。竹男さんは、気まりが悪くなりました。

「家へ帰って、もう一度聞いて来ます」

竹男さんは、あわてて家へ駆けもどりました。

**小学一年生に中学生の漢字力**

この文は、小学校の二年生の教科書にある文です。でも、その本では、●じるしのついている漢字だけが使われていて、その他の漢字は、全部ひらがなで書かれています。また、○じるしのついている漢字は、中学、または高校になってから学ぶ漢字です。

このように、中学生でも習わない漢字を多く使った、五、六年生でも読めない文章を、わたしの学級の一年生は、ばりばりと読みます。この程度に漢字を使った文章なら、いきなり読ませても、中以上の子どもなら、平気ですらすらと読みます。事実、大岡氏にお見せした授業は、参観者が教室に来られてから、

「きょうは、この勉強をしましょう」

といって、この文章を子どもたちに配り、下読みさせないで、いきなり名ざしして読ませたものです。

では、石井学級の一年生は、どのようにして、一年間に、このような文章が読めるようになったのでしょうか。

## 2　漢字はかなよりもやさしい

**一年生にはここから教える**

遠足

歩け、

歩け、
元気に　歩け。

これが、石井学級の一年生が、入学していちばんはじめに学んだ 文章です。もちろん、教科書には、

えんそく
あるけ、
あるけ、
げんきに あるけ。

となっています。そこで、この上にはり紙をしてかなをかくし、漢字に書き改めさせたのです。

**漢字はかなよりもやさしい**

ひらがなも読めないうちに、こんなむずかしい漢字を教えるなんて、ずいぶんむちゃな話だ」

こんな声が、わたしの耳には聞こえてくるような気がします。

しかし、これは、むちゃでもらんぼうでもありません。漢字のほうが、かなよりもやさしいからなのです。「あるけ、あるけ」よりも、「歩け、歩け」のほうが、一年生の子どもには、覚えやすく、読みやすいのです。これは、わたしがそう思うというのではありません。一年生の子どもたちがそういっているのであり、だから、石井学級の一年生は、はじめから、ことばを漢字で学んでいるのです。

むかし、望遠鏡を発明したガリレオは、地球が太陽のまわりを回っていることを確かめ、地動説を主張しましたが、当時の人々は、だれもこれを信じようとはしませんでした。望遠鏡により、天体の運動を観察すれば、だれだって、地動説の正しいことがわかるでしょうが、当時は、地球が動くなどということは、夢にも考えられないことだったので、こんなことは確かめようとする人がありませんでした。だから、いったん、地動説は立ち消えとなってしまったのです。

**漢字教育を科学的に考えよ**

「漢字はむずかしい」――これは、国語教育における天動説だとわたしは思っています。わたしたちは感覚にたよるかぎり、大地はじっとしており、太陽が動いている、としか考えられません。かなはや

さしく、漢字はむずかしい、というのは、やはり感覚にだけたよった感じ方です。しかも、科学的に実証しないかぎり、わたしたちはこの考えから抜け出ることはなかなかできないもののように思われます。

昭和二十八年から五年間にわたり、わたしは、これを科学的に調べてみました。「歩け、歩け」式の学習を三年間、「あるけ、あるけ」式の学習を二年間やってみて、それぞれの学習が、子どもたちにとって、どんなにむずかしいか、またやさしいかを、詳しく調べてみたのです。そして、この二つのやり方を比べてみますと、実にはっきりと、そのちがいがわかったのです。

「歩け、歩け」式の学習のほうが、比べものにならぬくらいやさしく、そればかりか、算数や社会科、理科の学習までが、能率的にぐんぐんとはかどっていったのです。

**科学的に実証できるわたしの方式**

石井方式は、いわば地動説です。科学的な方法によって発見され、正しいことが証明された方式です。しかし、人々が、感覚にだけたよ ってものごとを判断するかぎり、地動説が正しいものとはとても思えないように、石井方式の正しいことは、なかなか人々にわかってもらうことはむずかしいように思われます。

しかし、「あるけ」式と、「歩け」式と、この二つのやり方を実際にやってみれば、だれでも、はっきりと、石井方式の正しいことがわかります。この四月から、石井方式を採用した先生が、地方に何人かいらっしゃいます。その先生がたからのたよりによれば、「石井先生が、いかに、『漢字はやさしい』といっているとはいえ、これほどまでにやさしいものだとは思わなかった」と、ひとりの例外もなしに語っておられます。

**文化勲章の岡潔博士も認めた科学性**

この夏、わたしは、ある会に招かれて、石井方式の原理と、それを発見するまでの調査研究の発表をしたことがあります。そのとき、思いがけなくも、世界的に有名な数学者で、文化勲章を受けられた岡潔博士が、わたしの話を聞いてくださっていたのです。発表がすんでから、わたしは、博士に、石井方式の批判をお願いいたしました。すると博士は、

「研究調査の方法が、たいへんに科学的で、したがって、その結論は信頼してよい、とわたしは思い

ます。今後も、大いにその調子でおやりなさい」

といわれ、今後の研究方向や研究上の注意などについて、いろいろ教えてくださいました。

また、博士は、あらゆる学問を進めていくための基礎としてのことばの教育に、たいへん関心をもっておられ、

「小学校で、いたずらに計算技術を養う数学教育を行なうなら、それより、その時間を、ことばの教育にあてたほうが数学のためにもなる」という意味のことを、おっしゃっていました。

## 3　石井方式はこうして発見した

### 石井方式の発見のキッカケ

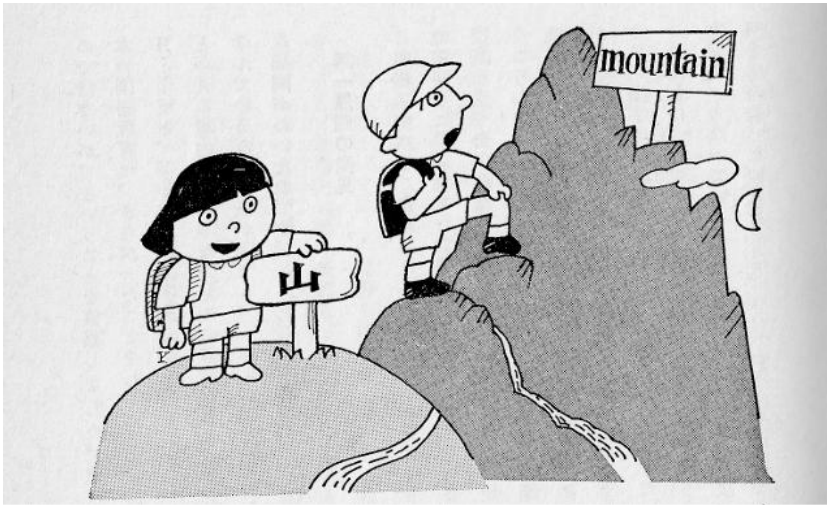
終戦直後、わたしは、高等学校で、英語を担当していたことがあります。そのとき、数人のアメリカ人と親しく交際する機会をもったのですが、かれらの書く文章に、意外なくらい、つづりに誤りのあることを知りました。

やはり、そのころ、まだ三つにもならない長男が、漢字を読む事実を、わたしは発見しました。ある日、わたしの読んでいる「国語教育論」という本の「教育」という字を指して、「キョウ、イク」と、読んだのです。わたしはそのとき思わず自分の耳を疑ったほど驚きました。

でも、どうして、三つの子が、「教育」という字を読んだのでしょう。調べてみますと、その一か月ほど前に、「教育音楽」という本の書名を指して、しきりに、なにかと、妻に尋ねたことがあった、ということがわかりました。妻は、そのとき、なにげなく、「キョウイクオンガク」と読んでやったそうです。この字を、三歳の子に教えてやったとすれば、それはただそれだけのことであり、そのときだけのことだったのです。しかし、子どもは、ただ一回だけの機会で「教育」という字形が、「キョウイク」という音を表わすものであることを覚えたのです。

### 山とmountainとどちらがむずかしい

わたしはこのとき、漢字の字形の複雑さは、漢字を覚えるために、なんのさまたげにもならないのではないか、ということを直感しました。それと、英語のつづりの複雑さとを思い合わせて、「日本の国




語教育は、まちがったことをしているのではないか」と、ふと思ったのです。「山・川・花・月……」と、「mountain, river, flower, moon……」とを比べてみるとき、漢字のほうがむずかしいといえる理由が、いったいどこにあるだろうか。かれらが、一年生から、「mountain, river……」を学んでいるなら、わが国でも、一年生が、「山・川……」を学んでよいのではなかろうか。……こんな疑問がわいたのです。

**第一原則の発見**

昭和二十六年、当時わたしの住んでいた東京都下八王子市に、教育委員会が生まれ、わたしは、その指導室に、主事として勤務することを命ぜられました。市内にある高校・中学・小学校を訪問して、授業を見、先生がたを指導し、助言を与えるのが仕事です。

こうして、わたしは、はじめて小学校教育の実際を、自分の目で見ることができるようになったのです。そこでわたしが、小学校の先生がたから訴えられた悩みというのは、「子どもたちの漢字の力が弱いこと」そのため、「社会科や理科の勉強さえまんぞくにできないこと」「これを解決するための、うまい漢字の指導法はないだろうか」ということだったのです。

わたしは、先生がたのこの悩みを解決してやろうと、考えた末の案が、いま、石井方式の「第一基本原則」となっている、「社会で、一般に漢字で書いていることばは、最初から漢字で書いて教えるべきである」という考えだったのです。わたしは、この考えを多くの先生がたに訴え、あるいは、勧めてみました。しかし、先生がたには、この考えは机上の空論としか考えられなかったようでした。だれひとりとして、実行してみようと申し出てくれる先生はいなかったのです。

**発奮して小学校教師となる**

たしかにわたしの考えは、机上の論にちがいありません。わたしには、実際に小学生を指導した経験

がないのですから……。しかし、自分の考えが正しいと信ずるわたしは、小学校の教師となり、実際に子どもを指導して、その正しいことを証明しようと考えるようになりました。

昭和二十七年の新しい学年を迎えると、わたしは、せっせと市内の小学校の一年生の教室を見て回りました。指導主事ではなくて、指導され主事になったのです。こうしてわたしは、一年生を担任する準備を始めたのです。

帰宅すると、ピアノの練習も始めました。これは一年生の担任として、絶対に必要な技術なのですから……。幼稚園に通う長男と、三つになる長女と、バイエルの練習をいっしょに始めましたが、いくらがんばっても、子どもたちにだんだんと引き離されていく悲しさを、しみじみと味わったこともありました。

昭和二十八年四月、わが子の小学校入学とともに、わたしは、新宿区の淀橋第一小学校の教師となり、待望の一年生を受け持つことになりま した。

## 4　クラス一の劣等児が文部省の目標の二倍も覚える

### はじめて一年生を教える

学校で一年生を受け持ち、帰宅しては一年生のわが子と語る……。これなら、一年生を受け持った経験のないわたしにも、なんとか人さまの子どもをあずかって、教育することもできるのではないか、という考えでした。たしかに、これはよい考えだったと思っています。たいしたまちがいもしでかさずに、まがりなりにもつとめて、子どもたちの両親から感謝されるくらいに子どもたちを教育し、三年生を終えるまで受け持つことができたのは、なによりもこのおかげではなかったかと 思っています。

しかし、それにしても、一年生を受け持つということは、なんとたいへんな仕事でしょう。五十人が五十人、みなちがった性格をもっている子どもたちが、それぞれちがった行動を思い思いに始めると、さあたいへん、これをどう扱ったらいいのやら、最初の一週間というものは、まったくとほうにくれたものでした。

そのうえ、学校が戦災にあい、教室が足りないために二部授業をする、という不利もあって、午後か

ら勉強を始める日など、遊びつかれてから学校にやって来る子どもたちを教えることは、なかなかたいへんなことでした。

しかし、それでも、五月、六月と、月日のたつにつれて、子どもたちも成長して扱いよくなり、わたしも指導のこつがわかって、学習もすらすらと進むようになりました。

**文部省の目標の七倍に成功**

わたしは、はじめ、一年生を終えるまでに、およそ二百字の漢字を教えて、そのうち、百五十字ぐらい覚えさせたい、と考えていました。

ところが、二学期の終わりから三学期にかけて、子どもたちの学習はとんとん拍子に進みましたので、はじめの予想を大きく上まわって、教えた漢字は三百字を越え、覚えた漢字も、二百字を越えてしまいました。

いちばんよかった子は、教えた漢字三百二十七字のうち三百五字を覚え、いちばん悪かった子でも、六十三字覚えました。クラスの平均は二百三字。

つまり、文部省の目標である三十字の、およそ七倍に近い漢字を覚えたわけです。なによりもうれしかったことは、いちばん成績の悪かった子どもでも、文部省の目標の二倍を越えていたことです。

この子どもたちが三年生になったときには、子どもたちの使っているノートや作文を見た先生たちは、異口同音に、「六年生もとてもかないません」といって、ほめてくれるほどになりました。

**あらゆる実験をこころみる**

このすばらしい結果は、「漢字がやさしい文字であること」少なくとも、「一年生にとって、漢字はむずかしい文字ではないこと」を証明したものであり、「歩け」式指導方式が正しかったために、このよい成績が得られたことを、わたしは確信することができました。

わたしは、自分が正規の小学校教師としての教育を受けておらず、そのため、指導技術も未熟であることを、十分に自覚していました。だから、ふつうの先生がたが、このやり方で教えたら、もっともっとすばらしい成績が得られるだろうと、確信していました。

ところが、先生がたはそうは考えてくれなかったのです。

「元指導主事の石井先生がやったから、成績がよかったのだ。一般にだれでもやれるという方法ではないのだ」

こういう声が、わたしの耳に聞こえてくるのです。しかも、こういう批評があまりにも強かったので、ついわたしも、「自分の指導技術はうまいのかもしれない」などというぬぼれ心も出てきて、「このすばらしい成績が、すべて、『歩け』式指導方式による結果である」といい切る自信が、すこしぐらついてきました。

「よし、もう一度一年生から、今度は、『あるけ』式指導方式でやってみよう。そうすれば、『歩け』式と『あるけ』式と、どちらがどれだけすぐれているかが、はっきりとわかるだろう。そこまでたしかめてみなければ、実験としては不完全なものだ」こう考えたわたしは、ふたたび一年生を受け持とうと決心しました。

## 5　文部省方式にはこんな欠陥がある

### かな書き方式の失敗

昭和三十一年四月、わたしはふたたび一年生を受け持ちました。今度は、三年間の指導経験を積んでいるので、一年生の扱い方もよくわかり、自信をもって子どもたちを導くことができました。それに、前回よりも幸いだったことは、校舎が増築され、二部授業がなくなったことでした。授業時間数も、前回に比べると、二倍近くふえました。条件は、あらゆる点で、前回よりよくなっていました。しかし、結果は逆に悪かったのです。

それは、漢字の覚え方が悪かったというだけのことではありません。もちろん、覚えた漢字の数も少なかったのですが、それよりもなによりも驚いたことは、「あるけ」式指導法には、いままでだれも気がつかなかった、致命的な欠陥があったということです。



## 子どもたちは知っている漢字をなぜ使わないか

わたしが指導主事をしていたころ、先生がたから、

「テストすれば書ける漢字が、作文にはなかなか使われない。これはなぜだろうか。また、この指導はどうしたらよいだろうか」

という相談をよく受けたものです。わたしは、この原因は、けっきょく、「漢字は画数が多くて、書くのにめんどうだから知っていてもわざと使わないのだろう」くらいに考え、そう答えていました。しかし、事実はそうではなかったのです。

なぜかといいますと、「歩け」式のときには子どもたちは、一度習った漢字は、作文のときはもちろん、どんな学科の学習のときにも、かならずこれを使って書いたのです。わすれてしまって書けないときには、かならず質問して教わり、かな書きすることは、けっしてなかったのです。

それは、「橋・箸・端」というように、発音に関係なく、ことばには決まった一つの書き方があって、そう書かなければならぬものと、子どもたちが考えていたためだと思います。極端にいえば、「橋・箸・端」を「はし」という書き方をしたのでは、意味の区別がつかないように、「山は、『やま』と書いたのでは、山の意味を表わすことはできない」と、子どもたちは考えていたのではないか、というように思われました。

だから、まだ教わらないことばを使うときにも、それをかなで書いて済ませる、ということをせずに、どう書くか、ということをかならず尋ねたものです。

## 漢字は使うことによって力がつく

漢字のほんとうの力は、使うことによってつくものです。「歩け」式指導方式が、すばらしい成果を上げたのは、実にこのためだと思います。また、文部省の目標の七倍もの漢字を覚えたということは、

たいへんなことのようですが、よく考えてみれば、実にあたりまえのことだったのです。

「あるけ」式では、ことばを、一つ一つ考えて書く習慣がつきません。一音一音を、機械的にかなに表わしていけば、それでよいのですから……。

これに反して、「歩け」式では、ことばを、ことばのもつ意味をしっかりとおさえてから、それを書かなければなりません。これは、ちょっと考えてみますと、たいへんなことのように思われますが、書くという仕事には、それだけの注意は絶対に必要なものです。これをなまけていたのでは、ほんとうの国語の力、ものごとを考える力はつかないのです。しかも、それは、最初に注意しさえすれば、すぐにその習慣がつきますので、心配するほどたいへんなことではけっしてありません。

**能力より習慣が問題**

漢字の力は、ある意味では、習慣の問題で、能力の問題ではありません。

よく知っている漢字でも、使わないでいれば、そのうちにこれをわすれてしまうでしょう。それにひきかえて、漢字を知らなくても、教わってでも漢字を使って書こうとする子どもは、かならずその漢字を覚えることができます。

漢字の力は、どんな能力のある子どもでも、漢字を使って書こうとする習慣がなければ、絶対につきません。これに反して、どんなに能力の低い子どもでも、漢字を使って書こうとする習慣があれば、その力はかならずつくものです。

「歩け」式学習方式は、だれでも、漢字を使って書く習慣を、きっとつけてやることのできる方式です。この方式で勉強する子どもたちは、「漢字を使って書きなさい」などという注意を受けなくても、かならず漢字を使って書くからです。

**文部省方式の致命的欠陥 (1)**

「あるけ」式学習方式では、先生が、どんなに口をすっぱくして、

「漢字を使って書きなさい」

と注意しても、子どもには、漢字を使って書こうという習慣はつきません。

わたしが先ほど、「あるけ」式学習方式には、致命的な欠陥がある、といったのは、これなのです。

いままで、どこの学校の、どの先生でも、

「子どもたちは、知っている漢字を使わない」

と嘆いています。その理由は、漢字の字形が複雑だからだ、と思っています。ですから、これはどうにもならない、いわば宿命的なもの、というふうにあきらめてしまっています。

わたしも、「歩け」式と「あるけ」式と、この二つの方式をやってみるまでは、やはりそう思っていました。けれども、「歩け」式をやり、そのうえ、「あるけ」式をやってみて、その結果があまりにもちがうので、ほんとうの理由がわかったのです。

**文部省方式の致命的欠陥　(2)**

わたしの指導主事時代、先生がたから相談を受けた問題に、もう一つ、

『火と（人）が木（来）ました』というような書き方をする子どもがひじょうに多いが、これをどのように導いたらよいのか」

という問題があります。これも、どこの学校の、どの先生もが嘆いている問題です。

この誤りの起こる理由は、「漢字を、ことばとして理解しないためである」と、一般に考えられています。ですから、「火」は、単なる「ひ」と、いう音を表わすものではない。「燃えるひ」を表わす字であって、「朝日」というばあいには使えない字である、ということをよく理解させればよい……。このように考えられていました。指導主事時代のわたしは、いつもそのように答えておりました。

しかし、問題は、そんなにかんたんなものではなかったのです。教師の、そういう注意だけで、子どもたちは、正しい漢字の使い方ができるようになるものではないのです。

これもやっぱり、根本的には、「あるけ」方式の生み出した欠陥だったのです。「歩け」方式のときには、なんの注意を与えないでも、こんな誤った使い方をする子どもは、全然ありませんでした。ところが「あるけ」方式では、

「火は燃えるひで、それ以外には使えない字ですよ」

と、どんなにていねいに教えても、一、二割の子どもが、まちがった使い方をするのです。

## かな書き方式の生んだ罪

結果がこうもちがってきますと、原因は、やっぱり「歩け」方式と「あるけ」方式そのもののちがいにあると考えないわけにいかなくなります。そこでよくよく考えてみますと、やっぱり、あります。実にはっきりとした理由があるのです。

「歩け」方式では、「火・日・人……」ことばの一つ一つに当たって、そのことば固有の書き表わし方を学んでいきます。子どもたちは、いちばんはじめから、そういう書き方をちゃんと学んで、文字というものはそういうものだということを、最初から理解してしまいます。しかも、「火・日・人……」など、すべてのことばを、はじめから漢字で学んで知っていますから、まちがって使うというはずがないわけです。

## かわいそうないまの一年生

ところが、「あるけ」方式では、はじめは、どんなことばでも、かなで教えます。だから、子どもたちは、なんでもかな書きする習慣が、できあがってしまいます。

それでいて、つぎに、「木」という字を学ぶと、「うえ木（植え木）」「つみ木（積み木）」と書かなければなりません。けれども「てん木（天気）」「木しゃ（汽車）」と書かなければいけないのか、それともそう書いてはいけないのか、ということになりますと、一年生の子どもたちには、この区別はなかなかつかないのです。

子どもたちは、「つみき」と書いて、「つみ木」と先生になおされます。そこでこんどは、「きしゃ」と書かないで、「木しゃ」と書きます。すると、こんどは、「きしゃ」となおされます。頭のよい子には、どうしてなおされたかわかるかもしれません。けれども、ふつうの一年生の子どもには、これではどうしたらよいのか、迷ってしまうのがあたりまえです。

昭和三十一年、わたしは「あるけ」方式をやってみて、教わった漢字を正しく使うということが、一年生にとってはどんなにむずかしいことか、はじめてよくわかりました。これでは一年生はかわいそうです。実にむずかしい、それでいてちっともきめのない勉強を、子どもたちはやらされているのです。

**人のふりみて、わがふり直せ**

こうしてわたしは、「やっぱり『歩け』方式でなければいけない」と思いました。「積み木、天気、汽車……」はじめから、こういう形で教えなければ、漢字の正しい使い方はできにくいのです。はじめから、こう いう形で教えてさえいれば、「てん木」とか、「木しゃ」とかと書く子は出てこないのです。

英語でも、はじめから、「night，knight，write，right」と、区別して教えています。「nait，rait」とは教えません。これは、世界じゅう、どこの国でもやっている文字の教え方です。ただ日本だけが、はじめに正しい書き方を教えないで、子ども用の書き方を教えているのです。「人のふりを見て、わがふりを直せ」ということわざがあります。しかし、それが正しいやり方であるなら、外国でどうやっていようとも、自信をもって、ひとりわが道を歩いて行くべきです。しかし、わが国のいまのやり方は、わが国だけのものであって、しかも、どうもまちがっているようです。いや、いままでのわたしの実験は、はっきりとまちがっていることを証明しています。



## 6　漢字に強くなる秘訣

**漢字に強くなる秘訣**

さて、ようやく、漢字に強くなる秘訣を語る機会がやってきました。もう、あなたにはおわかりではありませんか。それは、いままでにながながと語ってまいりましたように、「ことばを最初から漢字で教える」ということです。こうすれば、むだなほねおりをしないで、子どもたちは、漢字を正しく使う習慣を、身につけることができます。そして、この習慣ができあがれば、どんなに能力の低い子どもでも、かならず漢字を正しく使う力がつきます。こうして、「漢字に強くなる」ことができるのです。

この点については、第四章で、詳しくお話したいと思います。

**一字を知って十字を知る法**

この「ことばを最初から漢字で教える」ということは、石井力式の第一基本原則で、いわば、「漢字に強くなる」ための、もっとも基本的なものです。「鬼に金棒」の鬼のからだをつくることにあたりま

す。このうえに、金棒を持つことができたら、もう絶対にだいじょうぶです。ではその金棒とは、いったいなんでしょうか。

それは、漢字を体系的に教えることです。これは、もっとも科学的な、もっとも合理的な教え方です。このような教え方をすれば、子どもたちは一字を知って、十字を知ることができ、教わらない漢字を、読んだり、意味を知ったりすることができます。



## 十字を知るための一字の教え方

もう何年も前のことになりますが、「全国漢字漢文教育学会」という研究団体の依頼で、「漢字指導の実際」を多くの先生がたにお見せしたことがあります。全国から集まった大学教授から、高校・中学・小学校の何百人という先生がたを前に、わたしが、小学五年生に、国語の勉強をさせるところを見ていただいたわけです。場所はお茶の水女子大学の大講堂でした。

勉強している文章に、新しいことば（漢字）として、「噴火」ということばがありました。わたしは、この噴を、「口」と「賁」とに分解し、「賁」は「フン」という音をもち、「内部のものを外に出す」という意味をもつ部品であることを教えました。

つまり、「噴」は、その構造から、「フン」という音であり、「口から外にものをはき出す」という意味の字である、ということがわかるのです。「噴火」は「火山の火口から、火をはき出す」ということになります。

**子どもは一字から十字を連想できる**

わたしは、この指導をしたあとで、「憤」という字を黒仮に書き、「この字は、小学校では習わない字だが、よく考えれば、読み方も意味もわかりますよ。さあ、みんなで考えてみてください」

といいました。

わたしは、「フン」と読み、「心の中のものを外にはき出す」意味の字だ、と答えてくれればそれでよいというつもりだったのです。しばらくして、

「さあ、だれか」

と、うながしました。すると、何人かが手を上げました。そのうちのひとりをさしますと、その子は、

「音は、『フン』で、意味は『おこる』ことだと思います」

と、答えたのです。「心の中のものを外にはき出す」とは、「おこる」ことだと判断したのです。五年生でも、ここまでいくのです。これには、わたし自身が驚きましたが、参会者の先生がたはいっそう驚かれたようでした。

**頭を鍛えるために役だつ漢字教育法**

わたしは、さらに、「墳」という字を黒板に書いて、子どもたちに考えさせました。「憤」は「おこる」ことわかっても、これは、「おはか」とは、とてもわかるまいと思っていました。しかし、たしか、ふたりめの子どもだったと思います。りっぱに、

「おはかのことですか」

と、反問するように答えてしまいました。

うなったのは、わたしよりも、ごらんになっていた先生がただったでしょう。子どもの思考力・想像力というものは、わたしどもの想像以上のものがあります。こういう力は、使えば使うほど成長していくものです。子どもたちの思考力を練る、頭を鍛えるのに、これほどよい勉強法は他になにがあるでしょうか。そういう意味でも、こういう漢字の教え方は、すばらしい価値があるということができます。

しかし、いままで、この面の研究は、十分に行なわれていませんでした。心理学で、記憶のしかたとしてたいせつだといわれながら、研究する人がいなかったのです。

わたしは、いままで二十年以上、この問題を研究してきました。第五巻「漢字は生きている」に述べ

てあることが、それです。これを活用していただけたら、だれでもきっとお子さんを漢字に強くできる、とわたしは自信をもっておやくそくすることができます。

# 第3章　漢字はむずかしくない

## ー　漢字が覚えにくいといわれるわけ

**必要は記憶の母**

「必要は発明の母」ということわざがあります。必要が発明を生む原動力であることはたしかですが、必要は記憶の母であることも、また、まちがいない事実だと思います。ひどくわすれっぽい人でも、わすれてはたいへんだというたいせつなことだけは、けっしてわすれないものだからです。

文化勲章を受けた岡潔博士のお話ですが、博士は、学生時代、試験のための記憶が、ひじょうにじょうずだったといいます。試験が済むまではよく覚えているが、試験が済むと、決まって、とたんにすっかりわすれてしまう、ということでした。

これなどは、ほんとうに、必要が生んだ記憶の代表的なものだと思いますが、これほどはっきりした経験はなくても、これに近い経験は、だれでもきっとあるにちがいありません。

実はこれは、心理学者アールによって、もう五十年ものむかしに、実験され、発表されていることです。つまり、記憶するときの心がまえというものが、記憶や忘却に大きなえいきょうをもっているということを、アールは実験によって証明しているのです。

だから、たいせつなことをよくわすれるという人は、そのたいせつなことを、実はそれほどたいせつなことだとは思っていないからわすれる、ということになります。つまり、わすれっぽい人というのは、ものごとに無関心な人、無とんちゃくな人ということになります。

**記憶の原理**

記憶の原理に、「関心」とか、「興味」とかいうことばがよくあげられています。記憶術という名の本には、かならずといってよいほど、よく使われることばです。

物覚えが悪いといわれる人でも、自分が関心をもつこと、興味をもつことには、なかなかの記憶力を発揮するものです。どうも社会科がにが手だという人は、きっと社会的な事件に無関心な人です。つまり、関心や興味のあることはよく覚えられ、関心も興味もないことはよく覚えられない、ということになりますが、これをさらに掘り下げて考えてみますと、先に述べた「記憶するときの心がまえ」ということに帰着すると思います。

関心や興味のあることがらについては、しぜんに「記憶体制」が整えられるということです。これはきわめて最近の研究によるものですが、記憶は、意志によって行なわれるものと、意志に関係なく行なわれるものとがあって、長期の記憶は、後者によって行なわれるものだというのです。だから、「覚えよう」という意志を働かせて行なった記憶は、短期の記憶に属するものであるが、そののち（たいていは一時間以内に起こる）、頭の中の「記憶体制」がこれを整理して、あるものは長期の記憶に移したり、あるものはこれを完全にわすれさる、という仕事を行なっているというのです。

つまり、わたしたちの頭の中で、わたしたちの意志を離れた「記憶体制」が、「これは覚えてやれ」「これはわすれてやれ」「これは一生だ」「これは一週間だ」と、えり分けている、というのです。

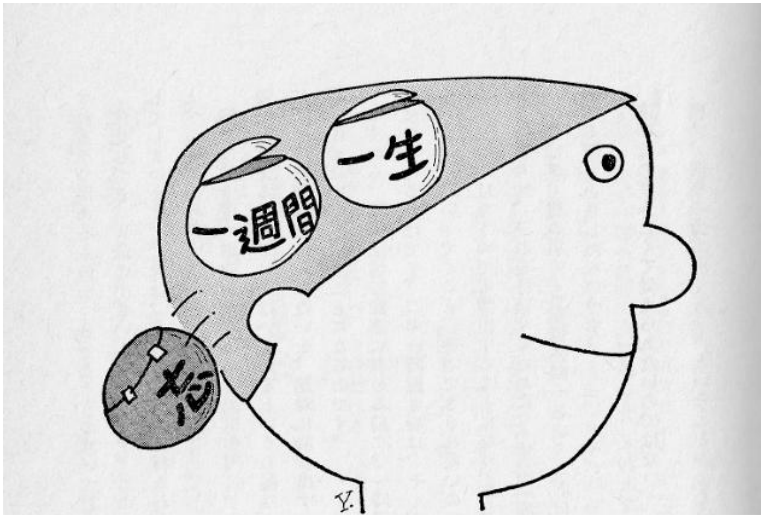
**わすれるのもたいせつな仕事**

この心理学説によれば、覚えるのが仕事であるのと同じ程度に、わすれることも一つの仕事である、ということになります。

つまり、わすれるということは、「排出作用」という一つのりっぱな仕事なのです。ですから、「習った漢字をわすれた」ということは、「頭を働かせて、頭の中にある漢字を捨てた」ということになるのです。

「そんなばかな。わざわざ頭を使って、ものをわすれるやつがあるものか」きっとそうお思いでしょう。でも、どうもこれがほんとうのようです。

生まれつき、胃袋の小さい人があります。この人は、ちょっと食べすぎると、食べたものを吐き出し




てしまいます。これは、その人の意志で行なわれるものではありませんが、その人の生命を守ろうとする「排出作用」にちがいありません。

脳には数十憶の細胞があるので、記憶作用は、まず無限だといってもさしつかえがありません。頭の中が覚えることでいっぱいになるという心配はまったくないのです。しかし、それほど広い脳だけに、よほど整理して入れないと、絶対に取り出すことができなくなります。つまり、覚えたつもりで、思い出せない、ということになるのです。

ですから、脳の記憶貯蔵庫に収める前に、一時置き場にしばらく置き、これをえり分ける仕事がたいせつになるわけです。この一時置き場は、そんなに広くありませんから、覚えることがあまりに多く、乱雑にはいってくると、整理できないので、受け付けを断わったり、緊急処置として、いったん受けつけたものでも排出することになります。いつまでも整理できないでいますと、脳が異常状態に陥るので、それを保護するために、「排出（忘却）作用」があるのです。

わたしが、前の項で、「記憶体制」ということばを使いましたが、それは、一時置き場に置いて整理する働きをさしたものです。

## 漢字はむずかしくて覚えられないのではない

戦後、漢字の力が弱くなったということがよくいわれます。と同時に、漢字がむずかしいということもよくいわれます。しかし、わたしは、これはあたりまえのことだと思っています。なぜかといいますと、戦後、漢字を軽んずる傾向が生まれ、「漢字なんか、覚えなくてもいいんだ」というような考えが、まず一部の教師の間に起こり、それが生徒にえいきょうして、漢字を勉強する場に、漢字なんてどうでもよいというようなふんいきがただよっているからです。

漢字を学ぶものが、「漢字なんてどうでもよい」「漢字を知らなくたって、たいしたことはない」というような考えでいたのでは、記憶体制が成立しません。こんな状態で学習したのでは、漢字がどんなに

やさし くても、記憶できるはずがありません。記憶貯蔵庫に収められないで、排出（忘却）されてしまうのです。そして、記憶できない漢字は、むずかしいことになるのです。

## 2 漢字がむずかしいといわれるわけ

### 漢字は世界で一番字数が少ない

漢字は、字数が、かなやローマ字に比べると、ひどく多いので、だれでもたいへんだと思っているようです。しかし、漢字は、文字であると同時に、語でもあるのです。たとえば、「山・川・花・月……」という漢字は、英語の「mountain, river, flower, moon」という語にあたります。だから、漢字の字数の多いのはあたりまえのことです。

英語のばあい、アルファベットだけ覚えてもなんにもなりません。ひとつひとつ、ことばのつづりを学ばなければなりません。ですから、同じ文字という名がつくからといって、まったく働きのちがう漢字とローマ字とを、そのまま文字として比べるのは、誤りです。

漢字のばあい、アルファベットにあたるものは、「字画」です。「丶・ノ・一・亅・乀」が、アルファベットです。とすれば、漢字は、世界でいちばん、文字が少ない、ということができます。つまり、

（語）　（文字）

mountain⟶m・o・u・n・t・a・i・n

山＝　⟶丨・亅・一・乀

River　⟶r・i・v・e・r

川＝　⟶丿・丨・亅

右のような関係になり、漢字はけっしてむずかしくない、ということがいえます。

### 字形が複雑だというのは見方のちがい

また漢字には、字形が複雑だ、という非難があります。しかし、これも、漢字が語であるということを考えますと、この非難はまちがいであることがわかります。たとえば、

東　⟶木・日
＝
East　⟶e・a・s・t

果　⟶木・田（𠙵）
＝
Fruit　⟶f・r・u・i・t

このように比べてみますと、漢字の字形が複雑であるというのは、やはり、漢字を語として考えないところから起こった非難だということが、よくわかります。

第五巻のIをごらんになれば、おわかりいただけますように、漢字は、どんなに複雑に見えるものでも、かんたんな部品が組み合わせられて、できあがっています。ただそれが、英語のばあいは、同じ方向につぎつぎとならべられていきますが、漢字は、重ねたり、上下左右にならべたりしますので、複雑に見えるのです。たとえば……、

・東は、木に日が重なっていて、太陽の出る方角を表わしていますし、果は、木の上に実（田＝𠙵）をのせて、木になる実を表わしています。もっと複雑な例をあげますと……。

・整という字は、束（木と口）と攵（ノと又）と正（一と止）の三つの部品が、左右上下の組み合わせになっており、その三つは、それぞれさらに二つに分けることができます。

このように漢字は、複雑のように見えても、分解すると、かんたんな、ありふれた形の集まりにすぎないのです。

**能力があるのに勝てないわけ**

わたしは小学生のころ、徒競走に出て、いちども入賞したことがありません。一年生のときから、小学校を卒業するまで、毎年、出場しているのですが、五、六人ぐらいで走って、三等までにはいることが、どうしてもできませんでした。

しかし、それは、いまにして思えば、わたしの実力がそうさせたのではなくて、「自分はだめなんだ。自分なんかに入賞できるはずはないのだ」という気持があって、人とはりあって駆ける、力を出しきって駆けることをしなかったためだと思っています。

なぜかといいますと、中学にはいると、最初の運動会で、どうしたことか一着になり、それが機会で自信がつくと、たちまちクラス代表の選手になり、しまいには、学校代表の選手にまでなったのですか

ら……。

つまり、わたしが、小学生のとき、いちども入賞できなかったのは、わたしの足がほんとうにおそいためではなくて、「自分はおそいのだ」という気持が、わたしの足を実際におそくさせていた、ということになるのです。

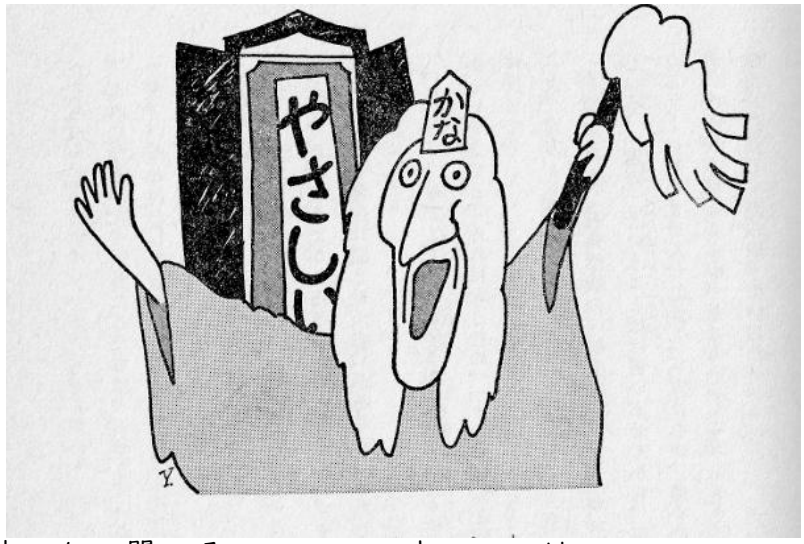
**むずかしいと思う気持が漢字をむずかしくしている**

おそいと思う気持が、足をおそくするように、むずかしいと思う気持は、やさしいことをも、むずかしいものに思いこませるものです。

いままで考えてきましたように、漢字には、むずかしいと思われやすい点がいくつかあります。「漢字は覚えにくい」「漢字は字数が多すぎる」「漢字は字形が複雑だ」これらの見方は、先に述べたように、すべて皮相の見方であり、まちがっていますが、よほど深く考えないと、迷わされてしまいます。そして、「漢字はむずかしい」と信じこんでしまいます。

さあ、そうなったらたいへんです。どんなにやさしい漢字だって、むずかしく思えてきます。

## 3　かながやさしいというのは迷信




**おうむの「オハヨウ」といぬの「ワンワン」**

朝、おうむを見たら、「オハヨウ」といいました。いぬは、「ワンワン」といって尾を振って近よりました。

さて、あなたは、このどちらに、朝のあいさつを感じますか。おうむの「オハヨウ」にですか。それとも、いぬの「ワンワン」にですか。

おうむの「オハヨウ」に、朝のあいさつを感じる人もあるでしょう。それは、「オハヨウ」というおうむの声から、聞く人が、人間どうしのあいさつを感じ取るためです。しかし、その声を出したおうむ自身は、その声に、なんの意味も感情も託しておりません。耳に聞いたかぎりでは、わ

たしたちのかわすあいさつと同じですが、中身はまったくちがっています。

これにひきかえて、わたしたちは、ふつう、いぬの「ワンワン」に、ずっとあいさつを感ずるはずです。いぬとわたしたちとの間には、「ワンワン」という声をなかだちにして、りっぱに感情の交流が行われるから です。

**一年生が論語を読む**

「とも、えんぽうよりきたる。またたのしからずや」

この文を一年生に読ませたら、おそらく、わたしたちが読むのと同じように、りっぱに声に出して読むでしょう。

ところで、あなたは、これを、「文を読んだ」といいますか。わたしは、そうはいいません。なぜかといいますと、それはおうむの、「オハヨウ」と同じように、ことばの働きがないからです。これに反して……、

「友、遠方より来る。また楽しからずや」

この文だと、石井学級の一年生は、「トモ、エンホウヨリクル。マタタノシカラズヤ」と、読むでしょう。「遠方」ということばは習いませんから、正しい読み方はできません。また、「来る」も「きたる」とは読めません。しかし、「友だちが、遠くの方から来る」という前半の文章の意味は、まちがいなく読み取ることができるのです。「エンホウ」「クル」……読み方こそまちがっていますが、意味だけは正しく読み取っているのです。前者が、おうむの「オハヨウ」なら、後者は、いぬの「ワンワン」にあたります。わたしは後者に価値を認めます。ことばが生きて、りっぱにその役目を果たしているからです。

**「読める」とはどういうことか**

読むとは、声を出すということよりも、その働きは、「意味をくみ取る」ことにあります。たとえば、声に出して読ませますとへたですが、よく文意を理解できる子どもがいる半面、いわゆる読み方はうまいが、いっこうに文意の読み取れない子どもがいます。わたしたちは、もちろん、後者よりも前者に価値を認めています。

しかし、外見だけでは、意味を読み取っているかどうかは、わかりません。そこで、やむなく、耳に聞いてわかる声だけを手がかりにして、すらすら読めれば、「よく読めた」と考え、つかえつかえ読むと、「よく読めない」と、考えるわけです。事実は、かならずしもそうではないのですが、そう考えるよりしかたがないわけです。

ところが、人は、うっかりすると、目的の意味よりも、手段の声のほうをだいじに考えるようになるのです。つまり、うまく声に出していえれば、「うまく読めた」と、ほんとうに考えてしまうのです。

かながやさしい、というのは、こういう考えから起こってきているのです。「とも、えんぽうよりきたる。またたのしからずや」――これが、声に出していえさえすれば、それで読めたと思っている人は、単純な頭の人といわざるをえません。

## かな書きの「源氏物語」はやさしいか

論より証拠、かな書きの「源氏物語」や、漢字が一つも使われていない「土佐日記」は、けっしてやさしくなどありません。それどころか、漢字に改めさえすれば、もっとずっとわかりよくなる、と思われることばがたくさんあります。

かながやさしいというのは、五十音を学べば、どんな文でも読める、と誤解しているからです。まったくあさはかな考えといわざるをえません。こういう人は、おそらく、ローマ字を学べば、英語やフランス語が、読めたり、書けたりできる、と考えるのではないでしょうか。ローマ字がどんなによく読めても書けても、英語やフランス語が、読めたり、書けたりできるようにはなりませんが、漢字は、読めて書ければ、国語も読めたり、書いたりできるようになるのです。同じ字という名がつくとはいえ、働きはまったくちがっていることを、はっきりと認識しなければいけません。

## 漢字で読み取ることばの意味

二年生の教科書に、「れっ車、はっ車、はくせん」ということばが出てきます。ふつうの学校では、これをどう教えていくか、考えてみましょう。

かな書きされたこれらのことばは、教えてやらなくても、声に出して読むことはできるでしょう。しかし、意味はわかりませんから、教えてやらなければなりません。そこで、教えてやるわけですが、「れ

っ車」と「はっ車」では、字形も読み方もたがいに似ていて、どちらがどうと区別することがたいへんにむずかしい。第一、意味を理解することがむずかしいし、覚えにくいので、「れっ車」を「はっ車」とまちがえたり、「はっ車」を「れっ車」とまちがえたりすることがあるほどです。

ところが、わたしの学級では、「列車、発車、白線」という形で習います。子どもたちは、この字を見ると、

「列は、一列二列の列だな。ならんでいる車のことかな。『れつしゃ』と読むのかな」

というように、自分ひとりの力で、意味や読み方を考えます。だから、「れつしゃ」ではなく、「れっしゃ」と読むのだとだけ教えてやれば、それで済むのです。

### 「はくせん」と「白線」とどちらがやさしい

「はくせん」では、読めても意味はわかりません。それがばかりか、それが、「白い線」であることは、教えてやってもなかなかわかるものではありません。ところが、「白線」では、子どもたちは、「しろせん」と読んで、自分の力で、意味を知ります。そこで、わたしは、

「しろい線のことを『ハクセン』というんだ。白は、『ハク』ともいうんだよ」

と教えてやりますと、

「先生、ぼくわかったよ。運動会の紅白玉入れの『ハク』がそうでしょ」

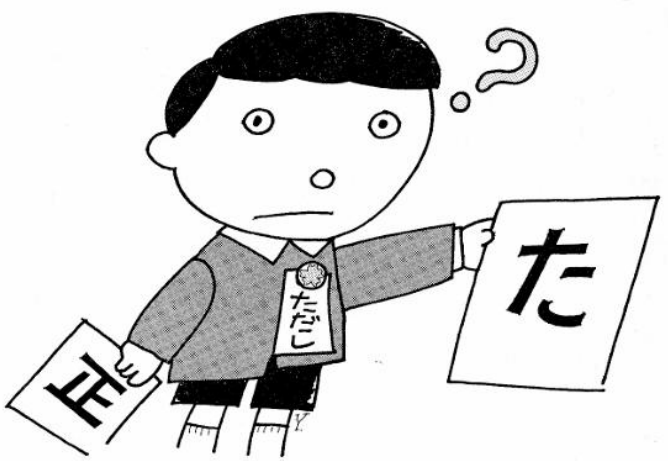
というのです。

このように、漢字で指導していきますと、教えてやらなくても、意味を正しく知ることができ、そのうえ、ことばを早く覚えて、早く使えるようになります。そして、なによりも価値のあることは、子どもたちが、「自分で考える」という態度を養ってくれることだ、とわたしは思っています。

### ひらがなの読めない子どもが漢字を覚えた

わたしが、いま、受け持っている学級には、一年生の一学期を終わっても、一文字のひらがなも読めるようにならなかった子どもがいます。こういう子どもは、わたしの十年間の小学校生活でも、ただひとりです。

この子は、ひらがな書きされた自分の名まえを見ますと、




「これはぼくの名まえだ」

といいます。しかし、その中のかなのどれかを取り出して、

「この字はなんという字？」

と尋ねますと、もうだめです。

「わからない、わからない」

の一点ばりです（この子は、入学前に一年間、幼稚園教育を受けており、自分の名まえだけはわかるようになっていたのです）。

ところが、漢字のほうは、三十二字も覚えてしまったのです。かなは一文字も覚えられなかったけれども、漢字は、文部省の一年間の目標を、一学期で覚えてしまったのです。

わたしはけっして、漢字だけを特別に指導することはしません。文章に即して、かなと同じ程度に指導するだけです。わたしの教室には、よその教室によくある、漢字カードなど、一枚だって掲げたことはありません。漢字表など、もちろんはってありません。それでこの結果です。この事実を、どう考えたらよいでしょうか。

## かんたんな字形のものほどむずかしい

ところで、この子どもの覚えた漢字の中には、数字は、「一」と「二」があるだけで、「三」以上の数字はありません。しかも、この「一、二」が読めたのは、一学期を終える直前だったのです。入学二か月後の六月十日のテストでは、「雨・雲・雪」や、「車・鳥・畑」などの複雑な漢字は読めるのに、「一、二」が、どうしても読めなかったのです。

わたしは、子どもに字を書かせ始めるのに、この「一、二、三」から始め、たびたび、くり返して練習させたものです。それは、この字の書き方は、いちばん基本的なものをもっているからです。「左から右へ」筆を動かし、「上から下へ」筆が及んでいきます。

ある時期には、毎日、この子の手を取って、

「さあ、一、二、三の三という字を書こうね。そら、イーチ、ニー、サン。棒が三本あるから、これ

は『サン』という字だよ。わかったね」

とこういう練習を何回くり返したことでしょう。ところが、一学期たっても、ついにこの、「三」が読めずに終わってしまったのです。

**かなはどんな漢字よりもむずかしい**

これほど物覚えの悪い例は、わたしもはじめてですが、「七」や「八」の覚えにくいことは、もう十年も前からよく経験しています。「七」を「ハチ」、「八」を「シチ」、または「ク」と読む子どもは、いままでも実に多くありました。これは、これらの数字が抽象的なものであり、字形となんの結びつきもないからです。字形がどんなにかんたんであっても、意味と結びつかなければ、記憶にならないわけです。

わたしは、「一、二」ほどやさしい字は世の中にない、といままで思っていました。けれども事実は、「車・鳥・畑」のような具体的な内容をもった字よりはむずかしかったのです。これがわかったのは、この子のおかげだったと思います。

さらに、このむずかしい漢字よりも、かなのほうがまだまだむずかしいことがわかったのも、この子のおかげです。一学期を終えて、一つのかなも覚えられなかったという、この事実です。

これは、意外のようでいて、よく考えてみれば、すこしも意外なことではありません。かなは、どんな抽象的な漢字よりも、ずっと抽象的なものだからです。

## 4　漢字はこんなにやさしい

**複雑な字を一回で覚える**

この子については、もっと驚かされたことがあるのです。一年の二学期の終わりに、国語の教科書に、「大掃除」ということばが出てきました。ちょうど十二月のくれですから、このことばが、よく使われたわけです。「除（ジ）」は、当用漢字音訓表にありませんので、「掃除」という使い方は、いまでは、小学校ではもちろん、中学でも学ばないのですが、社会的にはよく使われている字だとわたしは考えましたの

で、「大掃除」という漢字で、このことばを教えたのです。

このとき、「掃」の「帚」は「箒（ほうき）」で、だから、「掃」は箒を手にする、つまり、「はく」ことだと教えたのです。これは、「掃」という字を印象づけるために教えたのであって、もちろん、「箒」は当用漢字表にない字ですので、一年生に覚えてもらうつもりはまったくありませんでした。

ところが、三学期が始まったある日、ふと思いついて、わたしは、この「箒」という字を、黒板に書いて、

「この字の読める人」

と尋ねてみました。もちろん、ひとりも読めなくたってふしぎはない、というつもりでした。

ところが、多くの子どもたちにまじって、あの子が元気よく手を上げているではありませんか。わたしは、「おやっ」と思って、すぐその子をさしました。すると立って、元気よく、

「ホウキ」

と答えたのです。

## 漢字は、こんなにすぐ覚えられる

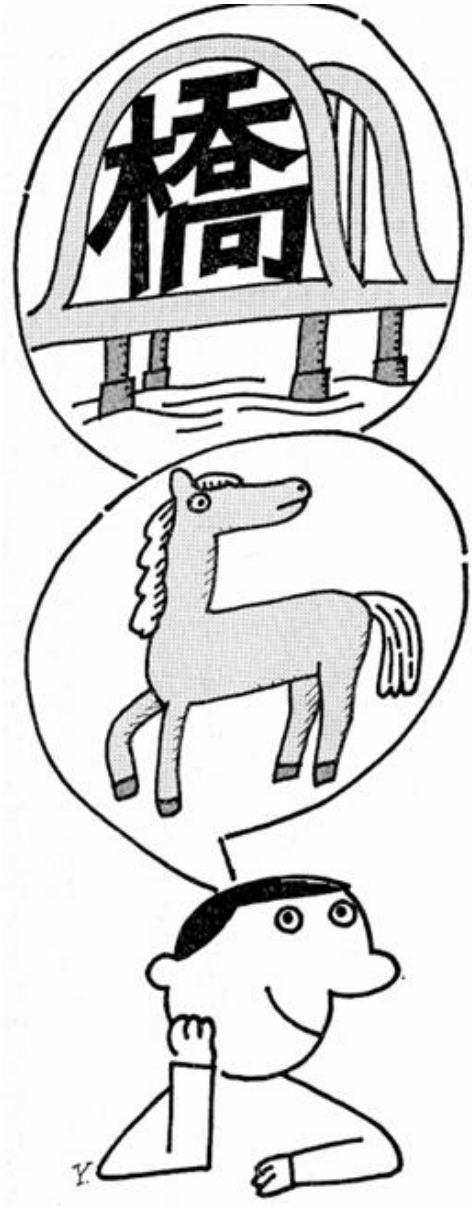
これには、わたしはまったく驚いてしまいました。一学期かかっても、一文字のかなも覚えられないというのに、「箒」などという、複雑な形をした字が、たった一回の指導で、どうして覚えられたのでしょうか。

けっきょく、これはつぎのように説明できると思います。つまり、箒の実体は、この子もよく知っている品物である。そのよく知っている実体と、「箒」という字形とを結びつければ、それで覚えられたということになるわけですが、この字形には、箒そのものを連想させるなにものかがあるにちがいない……と。

この学習は、「ほ」という抽象された音声と、「ほ」という字形とを結びつける学習に比べたら、ずっとずっとやさしいわけです。この子のように、能力の劣った子どもでは、「ほ」というような、意味のない音声を頭の中に描くことは、実にむずかしい仕事なのです。そのうえ、「ほ」という音声と、「ほ」という字形を結びつける、なんの手がかりもないのです。それは、能力のすぐれた子どもでも、実にむずかしい仕事です。

**漢字には顔がある**

いずれにしても、漢字には一年生の子どもにとって、実に覚えやすいなにかがあることだけは確かです。それは、どうしても、漢字が、一字で一つの意味をもっているということだと思います。「牛・馬・羊……」、漢字は一字一字が、実体をもっていて、その字を、ちらっと見ただけで、すぐに実体が頭の中にきれいに描かれるからです。




「漢字は生きている」わたしはそう思っています。「はし」では、なんの意味もありません。しかし、「橋」「箸」となりますと、はっきりと、その実体が頭の中に浮かんできます。

「うし」「うま」のばあいは、「はし」に比べたら、もっとはっきりしています。しかし、「うしのう」も「うまのう」も同じ字です。こういう文字では、小さな子どもたちには、わかりにくく、おもしろみがないのがあたりまえです。

これに比べて、「牛」「馬」という字は、生きているではありませんか。字が、はっきりとした固有の顔をもっているので、子どもたちの目には、とても印象的にうつり、すぐに覚えられてしまうわけです。

# 第4章　だれでもどこででも行なえる石井方式

## 1　石井方式の種あかし

### 石井方式の二原則

石井方式には、二つの基本原則があります。

（第一原則）社会で、一般に漢字で書き表わしていることばは、相手がたとえ小学校の一年生であっても、最初から漢字で書き表わして指導しなくてはいけない。はじめは、かな書きで学習させ、それに慣れてから、漢字書きに移る、といういままでのやり力は絶対にやめなければいけない。

（第二原則）社会科用語は社会科で、理・数科用語は理・数科で提出し、指導すべきである。いままで、あたりまえのように考えられていた、国語の教科書に提出され、指導されていない漢字は、他教科には提出すべきではない、という考え方は、ぜひとも改めなければならない。

### 正しい書き方はただ一つ

一九六一年の五月、「朝日ジャーナル」誌の座談会「漢字をめぐる諸問題」で、わたしはお茶の水女子大学の波多野完治博士と話し合ったことがあります。

「わたしは当用漢字で表わせるようなことばは、小学校の一年生のはじめから、漢字で教えます。なぜこんなことを始めたかというと、どこの国でも、ことばの表記は二本建てではない。ことばのつづりがどんなにむずかしくても、子ども向きのやさしいものをつくって教える、ということはしない。日本だけが、はじめ、『がっこう』と教えておいて、あとで、『学校』と教える。そこにむだがありはしないか。これが、石井方式実施の動機です」

とわたしが語ったのに対して、波多野博士は、

「それは重要な問題で、三つの点に注意する必要があると思う」

と前おきして、

「第一は、学習、あるいは教授体系における正書法主義ということです。これは石井さんの教授体系の中で、もっとも正しい考え方だと思う。一年生の教科書を正書法的に書き直して、それをつねに子ども

に見せることによって、漢字の習得率が上がった、ということは、大きな成果で、カリキュラムの編成に相当考えて、採り入れていかなければ いけない問題じゃないか」と大賛成の意を表わしてくれました。

**失語症患者も漢字だけは覚えている**

さらに博士は、

「第二は、日本の失語症患者、頭をタマで撃ち抜かれたりした失語症患者の中に、カナをわすれて、漢字だけを覚えているのが多い。そういう意味からいうと、漢字の中にも二つあって、ひじょうに抽象的なもの、たとえば『概念』とか、『範疇』とか、そういう文字はどうかわからないが、具体的な事物と結びついたもののばあいには、漢字は、人間の思考の初期には、記憶の助けになるんじゃないかということです」

第三には、「国際絵画言語（アイソタイプ）」という絵文字について話されたのですが、これは、オットー・ノイライトという人が、漢字の作り方を研究し、それを応用して作った、というお話でした。

わたしが、波多野将士の発言で、とくに注意していただきたいと思うことは、第一と第二です。

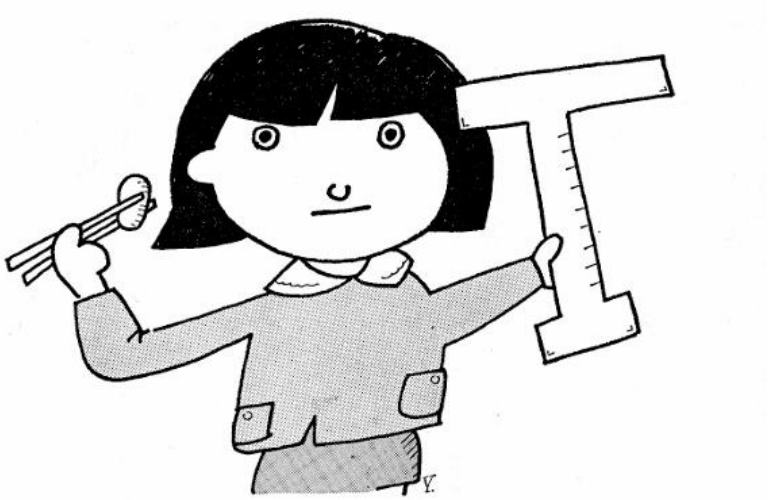
ことに第二は、「漢字は、人間の思考の初期には、記憶の助けになるんじゃないか」と、考えられていることです。漢字が記憶のささえになっているからこそ、失語症患者が、漢字だけは覚えているという事実があるのでしょう。

石井方式の第一原則は、このように、心理学的、科学的な裏づけが、しだいに多く発見されてきつつあるのです。

**ことばは漢字と意味で覚える**

第一原則を実行すれば、当然、第二原則も実行せざるをえなくなります。しかし、そんな理由ばかりでなく、もっと積極的な理由があるのです。

「みぎ」「ひだり」ということばは、算数用語で、一年生の算数で学びます。しかし、一年生には、なかなか理解できにくいことばです。能力の低い子どもだと、四、五年生でもよくまちがえます。しかし、これを漢字で学ぶと、ずっと覚えやすくなることがわかりました。



「右」・「左」の「ナ」は手のしるしです。もとの形は、「ナ（又）」で、手の形を表わしたものです。ですから、食事のとき、食べ物を口へ運ぶ手が「右」で、工作のとき、じょうぎ（工はじょうぎの形）を持つ手が「左」なのです。

こうして、ことばを、漢字と、意味と、この三つを結びつけて学習すれば、ことばだけを学習するよりも、ずっと覚えやすくなるのです。これについては、波多野博士は、

「どこの国でも、音声だけで覚えられているわけではなく、語形をたよりにしてことばを覚えている」

といって文字の価値を認めておられますが、表意文字である漢字が、ことばの学習に役だつことは、それ以上だと考えられることは当然です。

## 少ない時間でなんでも引き受けている国語教育

第一原則が、どこの国でも行なわれているように、第二原則も、実は、外国ではあたりまえのことなのです。たとえば、「ハンカチーフ」ということばでさえ、アメリカでは、社会科用語となっていて、その書き方も社会科の時間に習って、国語の勉強の時間にはしないのです。

どんな学科でも、その学科にたいせつな用語というものがあって、それをしっかりと学ぶことが、その学科の学習を進めていくのに必要なことなのです。だから外国では、その用語は、その学科でたいせつに扱い、読み書きもその学科で習っているのです。

日本だけが、なんでもかんでも、読み書きは国語教育に任せているのです。ところが、それでは、ことばや文字というものは、その使われる場によって、意味や内容にちがいがあるのですから、国語の時間に、理科や社会科の内容にまで深入りしなくてはならなくなってしまいます。

しかし、それも、国語の時間が外国なみに多くあるなら、よいでしょう。ところが、欧米、およびソ連の半分以下の時間しかないのです。つまり、日本の国語教育は、外国の半分以下の時間で、外国以上の仕事を引き受けているわけです。三年生を例にいいますと、

| | 授業総時間数 | 国語時間数 |
|---|---|---|
| 日本 | 二十二時間 | 六時間 |
| 東ドイツ | 二十四時間 | 十四時間 |
| フランス | 三十時間 | 十三時間四十五分 |

であり、アメリカは州によってちがいがありますが、だいたい東ドイツに近く、ソ連も同じです。こうしてみますと、日本だけが、教育方法から内容までまったくちがっていることがわかります。

**科学の国では国語教育を重んずる**

ついでにいいますが、日本では、理科学習を一年生から始めており、四十五分授業で、一、二年生が一週に二時間、三、四年生か三時間、五、六年生が四時間の学習をしています。ところが、ドイツでは、三年生まで理科がなく、四年生で二時間、五年生で三時間、六年生で四時間あるだけで、ことに三年生までは、国語教育に力を入れています。

これはどういうことかと、考えてみる必要があると思います。科学を勉強するためには、先人科学者の著述や記録を、正確に理解する「読みの力」がまず必要です。自分で観察し、実験したことを、筋道立てて、詳しく記録する「書く力」も必要です。科学を進歩させるためには、まず「読み書きの力」を養わなければならないことを、かれらはよく知っているからです。

科学を進めるためには、国語の時間をさいてでも、理科教育の時間をふやさなければ、というような考え方では、科学は進歩しないのです。

**石井方式の種あかし**

こうして、外国の実例を調べてみますと、実に意外なことを主張すると思った石井方式は、実はすこしも意外な考え方をしているものではなく、それどころか、もっとも平凡な、もっともあたりまえの考え方をいっているにすぎないことが、おわかりいただけたと思います。

「石井方式の二原則」などと大げさにいいましたが、実は、外国では、あたりまえすぎて、それ以外のやり方など考えられないくらいです。それだからこそ、わたしは自信をもっていままでこの指導を続けてきたのですし、いま、自信をもって、どなたにもこの方式をお勧めできるのです。

では、一九六二年四月から、学校全体が石井方式を行なっている、新潟県の袋津（ふくろず）小学校の実際をご紹介いたしましょう。

## 2 小学校では石井方式をこのように利用する

### 袋津小学校のすばらしい成果

一九六二年の十一月二十八日、袋津小学校は半年間の指導経過を世に発表しました。この会に、わたしは東大の宇野精一博士とともに招かれて、その成果を見てきました。それは、わたしの得たどの成果よりもはるかにすばらしいものでした。

たとえば、一年の山田学級では、学級の平均習得字数が、その年の十一月までで二百八十字に達しています。これは、文部省の一年間の目標字数の七、八倍にあたります。なお、最高は四百十字、最低は百二十五字です。つまり、山田学級の最低の子が、文部省の最高目標の三倍近い漢字を逆に半分の期間に覚えてしまったということになります。まったく驚くべき成果というよりほかはありません。

二年の石塚学級では、最高四百三十字、最低百三十字で、学級平均習得字数三百三十五字でした。これも、わたしには想像もできなかったすばらしい成果だと思いました。二年から始めたという悪い条件でも、ここまでいくということを示してくれた点で、貴重な実績だと思います。

### だれでもできた石井方式

「石井方式は、石井先生だからできるのだ。一般に、だれにでもできる方法ではない」などと、わたしの指導技術をほめたような、また、わたしの指導方式にけちをつけることをいいふらした先生がたよ。「どうぞこの事実を見てください」と、わたしは大きな声で叫びたい。

自慢じゃないが、わたしは指導技術など、ふつうの先生の半分ももっていやあしません。それは自信をもっていえます。だからこそ、わたしは、東京都には今時珍しい、仮免許状しか持っていないのです。

わたしは、わたし以外の先生がこの方法を行なったら、ずっとすばらしい成果を上げることをはじめから知っていました。袋津小学校の先生がたが、わたしよりずっとすばらしい成果を上げたのを見て、わたしは、弟子に打ちこまれた剣道の先生のような気がして、なみだの出るようなうれしさを味わいま

した。

ところが、このすばらしい成果は、一年生、二年生にかぎらなかったのです。三年・四年・五年・六年、すべての学年・学級が、それぞれすばらしい成果を上げています。

わたしは、これまで、石井方式は一年生から始めなければ成果を上げるのはむずかしい、と思っていました。しかし、袋津小学校の先生がたは、二年生から始めても、いや、もっと高学年から始めても、りっぱに成功することを、すばらしい事実をもって証明してくれました。

これは実に貴重な発見だと思います。石井方式は、いかなる学年からでも、どこの学校ででも、どんな先生にでもできることを、示してくれたものということができるのではないでしょうか。

（なお、袋津小――その後亀田東小と校名変更――の指導内容については、第3巻の一〇七～一一二頁を参照）

## 3　家庭では石井方式をこのように行なう

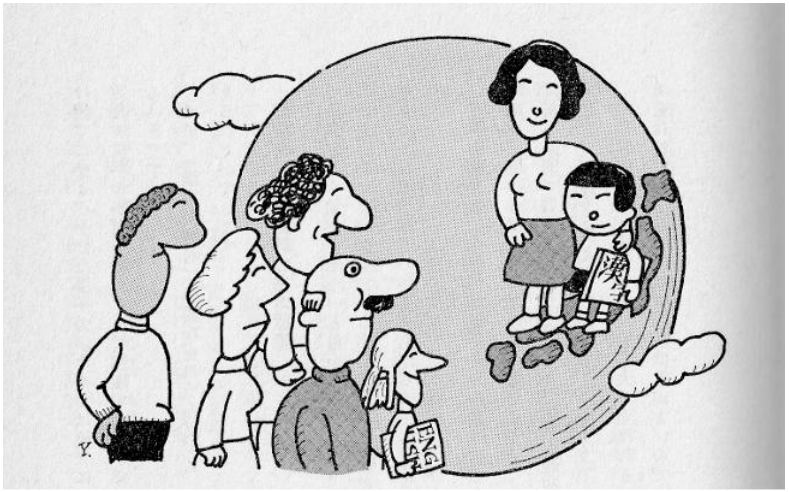
**おかあさんの心がけなければならないこと**

石井方式は、どこの学校でも、どの先生にでも行なえるものであることは、よくおわかりいただけたと思います。そこで、こんどは、どんな家庭でも、どんなおかあさんにでも行なえることをお話したいと思います。

「漢字は世界じゅういちばん覚えやすい字である」ということを、指導にあたるおかあさんが、まず心から信じてかかることが第一要件です。指導するものが信じていれば、指導を受けるものも、かならずそう信じるようになるからです。

この本を、これまでお読みくだされば、だれだって、「漢字はむずかしい」という迷信はなくなるはずですが、まだ心の片すみにでも、疑いが残っているようでしたら、石井学級、または袋津小学校を訪問して、ご自分の目で、実際をごらんください。

そして、「漢字はやさしい」と、おかあさんが信じ、漢字を学ぼうとするお子さんもこれを信ずるな



らば、かならず漢字はやさしく覚えられます。

**漢字はなぜ必要か**

つぎにもうひとつ、信じていただきたいことがあります。これはむしろいちばんだいじなことで、最初に申しあげるべきことかもしれません。

「漢字は、すべての学問を進めていくために絶対に必要なものである」ということです。

いままでに、十分に申しあげたつもりですから、もうくどいことは申しません。岡潔博士がおっしゃった、「漢字が読めないようでは、数学は絶対にできません」ということばだけは思い出してください。世界がどう変わろうと、今後の五十年、百年後の日本がどう変わろうと、漢字の必要性は絶対になくなりません。日本が世界に誇る精神文化は、また、世界が日本に期待するものは、すべて漢字を通してはじめて理解できるものです。

ですから、漢字の必要性のなくなることは、想像できるかぎりの将来には絶対にありえないことなのです。数学であろうと、医学であろうと、物理学であろうと、いまの日本文化のどの部門を受け継ぐにせよ、十分な漢字力がなくては絶対にできないことは、だれだって反対できません。それに、言語や文字の本質を考えても、想像できるかぎりの将来において、この必要性はなくならないと考えるべきです。

さて、「漢字が絶対に必要なもの」と信ずることができるならば、必要は記憶の母です。きっと覚えることができます。

**漢字を教えるための基本原則**

漢字をよく覚えさせたいと思っていらっしゃる、あなたのお子さんは、いま何年生ですか。もう四年生以上におなりでしたら、「体系的に漢字を学ぶ」という方法しかありません。といっても、この方法によれば、相当の効果を上げることができます。この全集の第五巻のIを十分に活用してください。三

年生以下でしたら、つぎの原則を実行してください。三歳ごろからでしたら、漢字教育を始める時期は、早ければ早いほど効果があります。

（基本原則）「どんなことばでも、かならず最初から漢字で示すこと」

（注意）「漢字を教えようと思ってはいけない」

木を育てるのと同じです。早く大きくなれといって引っぱってはいけません。こやしをやったら、あとはなにもしないで見ているほうがよいのです。

**四、五歳の子どもと絵本の扱い方**

では、四、五歳の子どもを対象に、絵本を利用した指導例を考えてみましょう。

むかしとちがって、いまは、すばらしい絵本がたくさんあります。それも年齢に応じてくふうされ、編集されています。四、五歳用の絵本でしたら、かなのない、絵ばかりなのが、適当です。もし、かながあったら、はり紙をして、そのかなをかくしてください。

絵本の内容は、動物や植物、それにおもちゃ、家庭の生活を扱ったものなどが適当です。

この絵本に、一～二センチメートルぐらいの大きさの漢字を書いた紙をはりつけるのです。たとえば、犬の絵のあるページには、「犬」という漢字をはりつけるのです。子どものふだん使っていることばや、おかあさんが子どもに対してよく使っていることばでしたら、どんなに複雑な漢字を書いてはりつけてもかまいません。

こうして漢字をはりつけておきますと、子どもは本を見るたびに、絵と字と関係のあることをひとりでに知るようになり、絵を見れば字を、字を見れば絵を、反射的に思い出すようになります。つまり、「犬」という字が、犬そのものを表わし、また、「いぬ」ということばを表わすしるしであることを理解するのです。こうなれば、第一段階はりっぱに成功したことになります。

**ひとりでに覚えたものは一生わすれない**

このように、ひとりでに覚えた記憶というものは、一生わすれることがない、というのは、つい最近の心理学で明らかにされたことです。ですから、あせらず、ゆっくりと、長い時間をかけて、気の向くままに任せておくのが、けっきょくは早いことになります。

それに、子どもの小さいうちに早く漢字を覚えること、それ自身には、たいした価値も意味もありません。十や二十（百でも同じことです）の漢字を覚えたからといって、なんの役にもたたないからです。

わたしが、「漢字を教えようと思ってはいけない」とご注意申しあげたのには、二つの意味があったのです。

前に、「漢字教育を始める時期は、三歳以後なら、早ければ早いほど」と申しあげたのは、このくらい早くから始めておけば、あわてることもなく、ゆっくりと、気ままに任せていられるからです。かりに、一か月に二、三字ぐらいの割合で覚えていったとしても、入学するまでには、百字ぐらいはらくに覚えられるからです。

くり返していいますが、あせったり、教えようという気持をむき出しにしたりしてはいけません。まして詰めこみ教育など、もちろん禁物です。

**教える順序はこうする**

いろいろの字が読めるようになったら、それらの字を組み合わせて、長いことばをつくり、これを絵本にはりつけてください。たとえば、「牛と馬」でもよいし、「大きな犬」「赤い花」というようなことばだと、もっとよろしいでしょう。

ついでですが、わたしの経験では、かなは、こういう、漢字と漢字とのつなぎことばとして教えるのが、いちばんよいと思っています。なぜかといいますと、かなはもともと具体的な内容や意味をもたない字なのです。ですから、「うし」「うま」というような具体物を表わす使い方は、漢字とかなの正しい使い方の学習に、さまたげとなると考えられます。

つぎに、教え方の順序の一例を申しあげます。

一　口→お口、花→お花、目→お目目、手→お手手

二　お日さま、お月さま、お父さん、お母さん

三　牛の子、鳥の羽、犬の赤ちゃん、お庭のお池

四　広い海、高い山、大きな汽車、小さい電車

五　赤い、赤い、夕日が、赤い。お日さま、にこにこ、雲の上。

**むずかしい漢字も恐れない**

いままで、むずかしい漢字というと、字画の多い、字形の複雑な漢字がそうだと考えられていました。したがって、やさしい漢字というのは、字画の少ない、かんたんな字形の漢字ということになっていました。しかし、これは、すでに申しあげましたように、だれでもそう考えやすいことではありますが、まったくちがっています。

子どもの生活に、もっとも縁の深いもの、子どものもっとも興味や関心をもつものを表わした漢字が、字画に関係なくよく覚えます。しかも、この点に同じ条件であるなら、字形の複雑なもののほうが、覚えやすいようにさえ思われます。

これは心理学的にそうなるはずです。単純なものより複雑なもののほうが、強い印象を受けるからです。記憶の手がかりが多いからです。ですから、いままでの考えに動かされずに、字画の多い字を恐れず、絵本にはりつけてみてください。




**書く指導はこうする**

「山、川、草、木、花、鳥、馬、牛、犬、羊、亀、雨、雲、雪、汽車、電車、自動車、手、足、口、耳、目、鼻、田、畑、池、海」など、絵になる具体物は、絵本の絵といっしょに見ることで、確実に覚えることができます。子どもにより、早いおそいのちがいはあっても、かならずひとりでに覚えます。

あせらずに、覚えるのを待ってください。

このころは、読むことはできても、まだ、書くことはとてもできません。でも、子どもが書きたがるようでしたら、そのまま書かせてもよいでしょう。書き方を教えずに、ただ見ているだけです。もちろん、筆順はでたらめ、形もめちゃくちゃでしょう。それがあたりまえです。書く絵を見れば、だれだってもっともだとわかるでしょう。子どもの書いた、人間の絵を見てください。大きな頭から、いきなり手や足が出ているでしょう。手の指だって、三本か六本か、そのときによりどうにでもなります。ですから、書いた字が、まるでおばけのようであっても、それがその子の正常な姿であり、悲観すべきことではすこしもありません。

**おばけのような字でもほめること**

急激な進歩というものは、どこかにむりを生じ、かえって有害なことが、あとから起こってくるものです。ですから、おばけのような字も、あわてて直そうとしないように願います。そういう段階は、正常な子どもがかならず通る段階ですから、安心してそのままにしておいてください。時期がくれば、絵がうまくなると同時に、字もしっかりと書くようになってきます。

どうも、絵だと、子どもらしい絵を喜んで見ていられるおかあさん（いや、先生でもそれが多いのですが……）も、字となると、子どもらしい、つまり、おばけのような字を書くのが、冷静に見ていられないもののようです。実に、一人まえの人間に対してするような要求をするおかあさんが多いようです。

これでは子どもがかわいそうですし、かえって正常な発達がさまたげられてしまいます。

絵だって、ひとりでに正常な絵に成長していくように、字だって、だんだん、字らしい字に成長していくのです。それは、はたでやかましく教えたから、うまくなるものではなく、時期が来れば、ひとりでに、しっかりした字を書くようになるのです。

いまの文部省指導方式では、読むのと書くのとをいっしょに教えることになっています。書くことによって、漢字の認識が深まるからだというのです。それはりくつの上ではそうです。しかし、漢字の認識を深めるために、書かせるというのは、あまりにもむだが多すぎることを知らなくてはいけません。

漢字の意味や使い方がしっかりとわからないうちから、字画もどうなってできているのかもわからな

いうちから、漢字を書かせて、どうしようというのですか。「漢字を書く」ということは、ある意味を表現する、ということです。心の中にある、ある考えを表わすということです。意味や使い方のわからない漢字を書くということは、まったく無意味な仕事といわなければなりません。こういう仕事を子どもにくり返しくり返しさせていますと、頭を使うことのできない、無気力な子どもができてしまいます。

**いまの教育に行なわれているムダ**

字形について認識の足りないうちから、漢字を書かせますと、一点一画ごとに、手本の漢字を見比べなければなりません。複雑な漢字になりますと、どこまで書き写せて、どの画がまだ書けていないかさえ、わからなくなります。

そんな書き方をしていたのでは、何十回書いたって、書けるようになるはずがありません。それは、まだ、はうことも立つこともできない赤ちゃんに、立って歩くけいこをさせているようなものです。むりです。歩けるようになったとしても、足が曲がってしまい、けっきょく、「歩く力」は正常な発達をすることができなくなってしまいます。

いまの国語教育では、時間をかけて、子どもに無益の苦労をさせて、「漢字を書く力」をさまたげる教育をしているのです。

はいはいしていた赤ちゃんが、立てるようになってから歩かせることを始めるように、漢字が読めて、意味もよくわかり、使い方もよくわかり、目をつむっても、その漢字の全体の形が頭の中に描かれるようになってから、書く指導を始める、というのが石井方式の書き方です。

頭の中に一瞬のうちに書ける漢字を、実際にはどのように、どんな順序で書くのかを教えるのです。ですから、子どもたちは、一点一画、手本と見比べて書く必要はありません。それは、機械的な無意味な仕事ではなくて、はつらつとした表現活動です。いままでの十分の一、二十分の一の時間と労力で、いままでよりずっと価値の高い、りっぱな漢字を書くようになります。これはもうあたりまえのことです。

「人が来ました」を、「火とが木ました」と子どもが書くのは、立てないうちに歩かせたから、足が曲がってしまった、ということなのです。石井方式では、「火とが木ました」などと書くような子どもは、絶対におり ません。

## 漫画ばかり読んで困るという子どもはいなくなる

おかあさんがたの悩みのひとつに、

「うちの子どもは、漫画ばかり読んで、親が読ませたいと思う本は、すこしも読まない」

ということがあります。しかし、これは、いまの教育ではあたりまえのことです。なぜかといいますと、漢字がよく読めないものですから、漢字をたくさん使って書いてある、「ためになる本」は、とても読めないのです。読めない本は読みたくないのがあたりまえです。絵本や漫画が喜ばれるのは、つまり、その程度の能力の子どもだということなのです。

石井方式で育った子どもたちは、漢字をたくさん使って書いてある本に、喜んで飛びついていきます。そういう本のほうが、この子どもたちにはおもしろいのです。一年生だって、

「かなばかりで書いてある本なんか、読みにくくって……」

といっています。ほとんど全部の子どもがそういっているのです。これがほんとうです。かながいいなんていうのは、正常ではありません。

「漫画ばかり読んで困る」というような子どもにしたくなかったら、どうしても、石井方式を実行しなければなりません。入学までに一年あったら、百から二百ぐらいの漢字を覚えることはやさしいことです。

これができたら、やさしい童話の本を読ませてください。かなの上から紙をはって、覚えた漢字に直すのです。また、これに、新しい漢字をはるのもよいことです。

新しい漢字を、教えないでも読ませられる方法があります。たとえば、「耳」「目」を覚えている子に、つぎの文を読ませてみてください。

○ うさぎの耳は 長いね。　　○ うさぎの目は 赤いね。

すると、「長い」「赤い」という字を知らない子でも、きっと正しく読むでしょう。このように文の中では、前後の関係で、知らない漢字があっても、けっこう正しく読んでいけるものだということがわかります。

また、こうして知らない字を、前後の関係から判断して読むということに、子どもたちは、なぞなぞ遊びをするような楽しみを感じているようです。しかも、自分の頭で判断して読んだ漢字というものは、印象に強く訴えるものですから、よく覚えられて、一石二鳥なのです。